

あとがき

政治、経済に限らず、社会のあらゆる分野、そして教育やスポーツの領域においてすら、モラルハザードが生じている。それはもはや偶然的要因によってではなく、構造的要因によって派生してきているように思われる。「自由」という人間の行動様式の無制限な解放と拡散の中で、「人間」としての自己規制、あるいは「人間」として保たなければならない資質が不明瞭化し、「徳」というものの明確な概念化を拒みはじめているように思われる。

実際、「ゲームズマンシップ」という新造語は、「スポーツマンシップ」が暗喩としてわれわれに強いる有徳性を揶揄する新造語として台頭したのであった。スティーブン・ポッター (Stephen Potter) は、第二次世界大戦後に『ゲームズマンシップの理論と実践』 (*The Theory & Practice of Gamesmanship* 1947) という本を出版した。彼は、「ゲームズマンシップ」という言葉を、1933年3月に友人に宛てた手紙の中で初めて用いたという。その定義は「実際にごまかすことなく試合に勝つ方法」 (the art of winning games without actually cheating) というものであった (同書13～15頁)。敗北を想定して、潔く、フェアに、美しく負ける態度を織り込んでいるスポーツマンシップに対して、ゲームズマンシップは相手を心理的にかく乱したり、違反すれすれのことをしてまで勝利にこだわろうとする姿勢を表現するものであった。ゲームズマンシップとは、スポーツマンシップという言葉に含まれる有徳性の欺瞞を、スポーツマンの本音が炙り出す新造語であったといえよう。

その本音こそがスポーツマンシップである、という考えに共感を示す者もいよう。スポーツのアマチュアリズムは遠い過去の「精神」となり、商業主義化の中でますます「プロフェッショナリズム」に求められる高度な技能は近代スポーツの「光沢」の源泉となり、遊びとしてのスポーツは疎外化されてスポーツの勝敗がプレーヤーを支配し、その結果が記録として消費社会的の中で物象化される。ゲームズマンシップという新造語は、スポーツマンシップの有徳性を

凌駕してスポーツが「商品化」の過程に取り込まれたことを、象徴的に告げる言葉であったともいえよう。

しかし、スポーツマンシップの有徳性は、もはや化石化し、社会的な流通性を失ってしまったのであろうか。おそらくそうではないであろう。「人間」としての普遍的価値、そしてまた文化的の奥底にある「人間」としての精神と倫理は、スポーツという文化的、社会的現象において、「徳」という行為と姿勢を導き続けるであろう。

ボルノーは『徳の現象学 徳の本質変遷』の中で、徳とは「道徳的なものに向かう意志の恒常的な方向」であり、また「魂に固有の働きに向かう魂の卓越性」をもたらすものであり、「いつまでもまったく新たにその考え方から生ずるのでなくてはならない」という固有な道德体験を介して得られるものであるという先人の指摘を前提に、徳とは何よりも「もっと深く人間の永続的な本質に何らかの仕方につながっている」ものであり、「もともと個々の行為の性質であるのではなくして、一連の行為のなかで一定の同一特質として貫徹している何ものかなのである」と指摘している（ボルノー、O.F.、森田孝訳、同書、白水社、1983、27～29頁）。スポーツマンシップの有徳性も、同様に、常に、本源的な人間の魂や資質や本質や良心と呼ばれるものを投影しているものなのであろう。スポーツマンシップの問題とは、プロやアマの社会的な存在様態の相違にあるのではなく、スポーツマンとしての「人間」的な「魂」や「良心」の保持と在りようにこそあるのだと思う。

本書は、スポーツマンシップの原理論ではなく、「スポーツマンシップ」と呼ばれる精神が、近代スポーツの形成の過程で、どのような具体的な契機を経て、また歴史的経緯によって誕生し、成長を遂げ、伝播したのかを論じたスポーツマンシップの歴史論である。本書は、次のような既出の論文を基にして構成した。

第Ⅰ編は、「スポーツの概念史」（宇都宮大学教養部研究報告第9号第1部、1976年12月）、「スポーツ概念の歴史」（『体育史講義』岸野雄三編著 大修館書店 昭和1984年2月）、「『スポーツマンシップ』の近代的語義の成立時期査定のための基礎的研究：主に英・米・日の辞書を中心に」（宇都宮大学教養部研究報告第18号第1部、1985年12月）、「辞書にみる'スポーツ'概念の日本

的受容」(中村敏雄編 『外来スポーツの理解と普及』 創文企画 1995年7月)等を簡略にまとめたものである。

第Ⅱ編は、「イギリス・スポーツ：その形成と変質」(『無限大』 No.102, 1997年11月, 日本アイ・ビー・エム株式会社), 「リレー人物体育史(6) アーノルド：イギリス・スポーツ教育の功労者」(体育科教育, 25巻11号, 1975年10月号), 「スポーツによる人間形成の歴史」(学校体育, 34巻9号, 1981年8月号), 「パブリックスクール・マッチ論争に関する一考察 — ウィカミスト会議事録(1858)を手懸かりとして —」(体育史研究 第13号 1996.3月), 「クラレンドン委員会報告書(1864)にみるゲーム活動の状況」(東京学芸大学紀要第5部門 芸術・体育, 第35集, 1983年10月), 「パブリックスクールにおけるゲーム活動の組織化の原理：能力主義の神話とノーブレス・オブリージの残存：クラレンドン委員会の報告書(1984)を中心として」(体育史研究, 第1号, 昭和59年5月), 「ウィリアム・ウェップ・エリス神話と『ラグビー・フットボールの起源』(1897)」(筑波大学体育科学系紀要, 第30巻, 2007年3月)を基にして構成した。

第Ⅲ編は、『筋肉的キリスト教』と近代スポーツマンシップの理念形成：チャールズ・キングズリを中心として」(『岸野雄三教授退官記念論集：体育史の探求』, 1982年3月), 「近代スポーツマンシップと男性アイデンティティ — 筋肉的キリスト教徒トマス・ヒューズの言説空間 —」(『現代のエスプリ, 別冊, セルフ・アイデンティティ：拡散する男性像』, 編集 榎本博明, 至文堂, 2007年4月)を基にした。

第Ⅳ編では『オリンピズム』概念の予備的検討 21世紀オリンピズム構築のための基礎的研究」(課題番号 16500424, 平成16年度～17年度科学研究費補助金(基礎研究(C))(1) 研究成果報告書, 平成18年3月, 研究代表 山本徳郎), 「武田千代三郎の『競技道』の系譜とその歴史的 성격」(体育科学系紀要第25巻, 2002年3月)の論考を加筆修正した。

上記の古い論考を電子化するにあたり, 博士課程の梶孝之君の献身的な協力を得た。このように異なる時期の多くの論考を取りまとめて本書を構成したことから, 論述上の齟齬やつながりの悪さ, 誤りや論理的な矛盾が多く見出されると思う。読者からの忌憚のないご批判をいただければと願っている。

本書は、多くの人々のお力添えによって出版できた。体育・スポーツ史研究に導いてくださった故岸野雄三先生、成田十次郎先生、山本徳郎先生、清水重勇先生、イギリス留学時代に面倒を見てくださったデイヴィッド・マックネアー先生 (David McNair)、故ピーター・マッキントッシュ先生 (Peter C. McIntosh)、ジェームズ・マンガン先生 (James A. Mangan)、スティーヴ・ベイリー先生 (Steve Bailey) そして博士論文を指導してくださった山内芳文先生と宮寺晃夫先生に心からの感謝の意を表したい。また、筑波大学出版会からの出版を企画し、指導してくださった谷川彰英先生、大熊廣明先生、窪田眞二先生に対して、更に、本書を具体的な形にしてください出版会や丸善プラネットに対して、心からお礼を申し述べたい。最後に、日本におけるスポーツマンシップの恩人、武田千代三郎氏の写真を用いることを快く承諾してくださったお孫さんの武田博允さん、そしてクーベルタンの原稿の翻訳を国際オリンピック委員会に承認してもらった折に力を貸してください出版会や丸善プラネットにあるIOC附属オリンピック・ミュージアムのヌリア・ピュイグ主任 (Nuria Puig) に対して心からの謝意を捧げたいと思う。

2008年12月

阿部生雄